

3-1 終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、 および陸地測量部から地理調査所への改組について (渡辺正氏資料をもとに)

金窪 敏知 (元国土地理院)

外邦図研究会との係わり

外邦図研究会には本日初めて出席して報告を致すことになりましたが、実は今年は私にとって外邦図との係わりが殊のほか深く、今日ここでお話をすることに何か不思議な出会いといったものを感じております。

先ず最初に、「外邦図」の定義ないし概念ですが、『測量・地図百年史』(昭和45年3月、日本測量協会発行)の「第 編外邦図のまえがき」に次のようにあります。

外邦図や外邦測量という言葉は、陸地測量部で満州や中国・東南アジア等を対象地域とした地図や測量に与えた言葉である。

この言葉には、作戦や戦闘行為のために必要な地図を、事前にあるいは戦中に秘密のうちに作成するという意味がこめられていたのであるが、この編では、もっと広い意味でとらえ、台湾・樺太・朝鮮等、かつて外地と呼ばれた旧領土や、その他日本の手で地図が作られたすべての地域の測量と地図を取り扱うことにする。

外邦図や外邦測量の歴史は古く、明治7年に清国渤海地方図と陸軍上海地図を、明治8年に清国北京全図、朝鮮国全図、そして、亜細亜東部輿地図を出版しており、日本国内の近代測量が緒についたかつかぬうちに、もう外邦図作成が始まっ

ているのである。そして明治10年の西南の役で迅速測図班が戦地で地図を作ったように、日清戦争・日露戦争・青島作戦・シベリア出兵・満州事変・支那事変・第2次世界大戦にはいずれも臨時測図部や臨時測量部、あるいは派遣測量隊や軍測量隊などが編成され、外邦図の作成に当たっている。

明治17年の参謀本部地図課の服務概則、総則第5条に「第3班外邦図及臨時指令ニ応スル地図、図書ノ調製ヲ掌ル」とあるように、こうした国外の地図を外邦図と呼ぶこともかなり古くから行なわれたようである。

このような概念による外邦図の作成範囲は、台湾、樺太、朝鮮、南洋諸島(委任統治領)、満州および関東州などの全域、その他中国、蒙古、シベリア、東南アジア、印度、ニューギニアおよびニューブリテン島、ソロモン諸島・ニュージーランド、ハワイ諸島、アラスカ地方、オーストラリア等に及んでいます。縮尺は、5万分1、10万分1、20万分1、25万分1、50万分1、100万分1等でした。

私は現在岐阜県図書館の特別顧問をしております。ご存知のようにこの図書館には世界分布図センターという機構があって、東北大学から譲り受けた外邦図一式を取り揃えており、また最近、建築家である山下和正氏の古地図コレクションを受け入れて

おります。私も山下氏に倣って、コレクションというほどではありませんが、長年自然に集った主題図等の地図類を死んだら寄附しようかと考えて、ぼつぼつ整理を始めているところです。私の持っている外邦図は、約 35 年前に国土地理院の製図課長補佐をしていた当時、大掃除で棄てられようとした作業用の地図を貰い受けたものが主体で、約 300 点あります。小縮尺図を編集するために計曲線を選んで墨入れをしたもの等を含めて、複数部あるものがかなりあり、実質的には 194 図葉です。

次に、今年の 5 月中旬に目黒区にお住まいの佐藤礼次さんという方から分厚い封書が届き、中に A4 横書き 60 枚ほどの原稿が一式はっていました。国土地理院に勤めていた小林弘氏の紹介ということでしたが、佐藤さんはやはり国土地理院に勤めていて亡くなられた村上成夫氏の甥に当る方で、また、成夫氏のお父さん、すなわち佐藤さんのお祖父さんは、村上千代吉と言って陸地測量部の職員であったそうです。10 年近く前に、この村上千代吉氏の残した手帳が 32 冊出て来たのですが、これが明治 38 年から昭和 13 年まで 33 年間におよぶ千代吉氏の主として外邦測量に関する活動記録でした。佐藤さんはこの手帳の解説をかねてより知人の牛越国昭氏に依頼していましたが、このほどようやく牛越氏による原稿という形でまとまったので、目を通して欲しいということでした。

原稿を読みますと、村上千代吉氏は明治 38 年に陸地測量部に採用され、直ちに朝鮮に派遣されて測量を行ったのを皮切りに、南清、北清、蒙古、シベリア、山東、満洲など、各地の測量、時には秘密の測量

に従事しております。明治 40 年には現地で逮捕されて危うく殺されかけたこともあります。すなわち、この 32 冊の手帳は外邦測量に従事した人々の苦勞を切実に物語る記録ですが、何れ出版して公表される予定と伺っております。

続いて 5 月末に、日頃親しくして頂いている自衛隊 0B の高木勲氏からご相談を受けました。それは今日お見え頂いておりますが、終戦当時大本営参謀であられた渡辺正氏から自分が保存している資料を整理して、然るべきところに納めたいというご依頼を受けたのであるが、内容をみると、自衛隊と国土地理院とに分けて納めたらどうかと思い相談にきたということでした。渡辺氏は陸軍士官学校 49 期生、高木氏は 58 期生、私は仙台陸軍幼年学校の 48 期生で（渡辺氏に言わせれば半玉ですが）陸士 63 期生相当であり、いわば大先輩にあたる訳です。約 50 点の資料には実に驚くべき内容の記録が多く含まれており、早速資料整理のお手伝いをさせて頂くことになり現在に至っております。

また、7 月には沖縄県宜野湾市でアジア太平洋地域地図会議が開催されました。そしてこれに付随して、地球地図フォーラムや日本国際地図学会の大会が開かれ、私も学会に参加しました。外邦図研究会の存在は事前に清水靖夫氏から伺っておりましたが、沖縄の学会で小林茂先生の「外邦図研究の成果と課題」と題する発表をお聞きし、若干のコメントを差上げたのが切掛けでお近づきになり、ご依頼によりこの外邦図研究会でお話をする事になった次第です。

渡辺正氏資料について

後で改めてご紹介申し上げますが、渡辺正氏は、昭和19年5月から昭和20年9月終戦による復員まで、参謀本部陸軍参謀・大本営参謀陸軍少佐として、情報担当の第二部に所属し、主として第二部第四班において、情報に関する総合情勢判断、兵要地誌、および陸地測量部の管轄を担当されました。

渡辺正氏が保存しておられる資料は、以下通し番号を付けて渡辺氏資料と呼ばさせていただきますが、その内容はおよそ次の通りであります。

- (1) 大東亜戦争末期に本土決戦に備えて計画実施された兵要地理調査研究会に関する資料
- (2) 終戦前後における地図等の焼却処理ならびに陸地測量部組織の処理に関する資料
- (3) 戦後進駐軍との折衝に関する資料
- (4) 兵要地理および地誌に関する資料
- (5) その他

進駐軍との折衝に関する資料には英文が含まれています。

本日私がこれからお話しする内容は、渡辺氏のお許しを得て、主としてこの渡辺氏資料ならびに直接ご本人からお聞きしたことに基くものであることを、先ずお断り致します。

兵要地理調査研究会について

大東亜戦争末期に本土防衛を万全なものにするために、渡辺参謀の発案で著名な地理学者を糾合し、命題別に期限を限って兵要地理調査研究を実施することになりました。

た。この調査研究会の発足に先立って、一つの委員会が設置されております。その名称は審らかではありませんが、この委員会の第二回会合の資料が残っています。すなわち、昭和19年12月15日(金)丸ノ内ホテルで開催され、参集者は委員18名、議題は、研究項目確定、執筆者の決定、研究会の運営および委員の分担決定、その他となっています。委員会の構成は、地理、歴史、社会、思想、政治、法制、経済、文化、外交、軍事と、幅広い分野に関する学者および専門家となっております。地理の委員として、多田文男、渡辺光のお二人の名前が載っております。なお、この文書によりますと第一回会合は12月6日(水)に開かれたようですが、詳細は不明です(渡辺氏資料4)。

この頃戦局は日に日に我が方に不利になって来ており、11月にはサイパン基地からB29が本土来襲を開始、明けて昭和20年には米軍は1月にルソン島に上陸、更に2月に硫黄島に上陸、守備隊は3月に玉砕しました。このような情勢にあって、大本営は1月20日に本土決戦に関する作戦大綱を決定しています。

参謀本部の中では、「今更兵要地理なんか」という声もあったそうですが、第一回の兵要地理調査研究会は昭和20年4月30日(月)牛込区市ヶ谷の参謀本部第二部で開催されました(渡辺氏資料1、2、3)。沖縄に米軍が上陸して死闘が続けられている時期であります。研究会の参集者は、参謀本部側が第二部長の有末精三中将(陸士29期)以下、第四班、第五課、第六課、第七課の各課長および班長、関係部員で、地理学者は15名が集りました。議題は研究題目の検討および担任決定でした。

このときの人選は、渡辺参謀が当時東京帝国大学理学部助教授で資源科学研究所員を兼ねていた多田文男氏に相談して、先ず東京帝国大学辻村太郎教授、次いで東京文科大学田中啓爾教授が選ばれ、以下、陸軍予科士官学校、陸軍気象部、内務省国土局、文部省国民教育局、東亜研究所、東京帝国大学、東京文科大学、東京高等師範学校、学習院の各組織に所属する地理学者が集りました。なお、このあとの会合では、京都帝国大学からも参加しております（渡辺氏資料5）。

余談として、中野尊正教授が著書『山河遙かに』に書いておられますが、多田文男氏の推薦で中野氏もこの兵要地理調査研究会の一員となる筈だったそうです。中野氏は資源科学研究所員で、内蒙古や熱河の調査をされた経験がありますが、昭和19年5月に応召で高知の聯隊に入隊し、直ぐに満洲の虎頭、次いで東安で警備に当っておられました。多田氏の推薦を受けて渡辺参謀が中野氏を参謀本部に呼ぼうとされたときは、久留米の予備士官学校に入校された後だったので、沙汰止みになったということでした。

兵要地理調査研究会では、研究題目が個人ごとに細かく分担を定められ、研究成果の提出期限は、一部中間報告の作業を含み、昭和20年5月13日とされました。その成果は現在残されておりませんが、完成資料目録によれば、次の通りです。

- (1) 本土二於ケル上陸適地トシテノ砂浜概況
- (2) 本土周辺主要島嶼ノ調査
- (3) 海岸地形ノ特質概況
- (4) 内陸機動價値判断図

- (5) 食糧関係資料
- (6) 活用可能道路網図（間道）
- (7) 隔海度図
- (8) 米英「ソ」ノ東亜政策の究明
- (9) 帝国本土二於ケル要域観察判断

参謀本部からは、これらの成果に対する謝礼金として合計3500円が昭和20年8月に支払われ、その予算は第二部第六課から支出されております。

兵要地理調査研究会の成果の一つとして、仮に米軍が関東地方に上陸作戦を行うとすれば、九十九里浜か相模湾かが議論され、研究会は相模湾という推定をしました。参謀本部の中では九十九里浜説が多かったそうですが、戦後になって米軍に質したところ、相模湾を考えていたそうです。

陸地測量部の松本疎開

次に陸地測量部に関するお話ですが、参謀本部に所属していた陸地測量部の庁舎は三宅坂にありました。以下『測量・地図百年史』に拠りますと、戦争末期における主要業務はいわゆる「マルタ」作業といわれるもので、本土決戦に備えて大縮尺の測図や修正および地図上に距離方眼を入れたり、水深線を描画したり、その他作戦に必要な事項を描入する応急修正図作成作業でした。

昭和19年戦局の悪化に伴って東京の疎開が始まり、陸地測量部も4月にまず東京杉並区の明治大学予科の校舎に移りました。この頃から兵要図量産のため地図印刷を民間会社に外注し、緊急作業隊を編成して監督を行っております。

昭和20年に入ると、各測量班も測量どころではなく、東京も空襲が激しくなったの

で、5月に長野県松本市郊外へと第2次疎開が決められましたが、不幸にして、5月24日夜の空襲で当時新宿駅にあった疎開荷物が貨車ごと炎上し、多数の貴重な資料を失いました。また、20万分1帝国図の銅原版は三宅坂庁舎印刷工場の廊下に並べられたまま、たった一日の輸送の遅延のためにその殆んどが灰燼に帰してしまいました。

長野県の疎開先では、総務課と第三課(旧製図科)の製版と印刷が波田村、第三課の製図関係が梓村、第一課(旧三角科)と第二課(旧地形科)が塩尻、教育部(旧修技所)が温明の、各国民学校に分散配置されていました。当時陸地測量部の編成人員は将校・高等官84名、下士・判任官290名、生徒125名、雇傭人524名、その他召集軍人・徴用工が多数配置されていました。

なお、製版および印刷関係は梓村尾入沢に半地下の工場を作る計画でしたが、終戦で作業が中止になりました。また別に岐阜県高山市に印刷工場の再疎開の計画がありましたが、これも終戦で工事が中止されています。この辺の経緯については、陸地測量部第50期生で第三課所属の技手であった大井淳氏の記録(『想 陸測第五十期生徒之記録』、平成2年6月、むさしの地図株式会社発行(非売品))に詳しく載っています。なお、陸地測量部疎開のため先遣隊として現地に向った一行の中に、伊理中佐の名がありますが、この方は伊理仁一工兵中佐で、伊理正夫教授(中央大学理工学部、東京大学名誉教授/情報システム工学)の父君に当たられます。

終戦に伴う書類(地図を含む)の焼却について

ポツダム宣言の受諾、そして終戦に伴い、昭和20年8月15日付で「陸軍秘密書類其ノ他重要ト認ムル書類(原簿共)」の焼却命令が参謀総長名で発せられました(渡辺氏資料6)。ここでいう「其ノ他重要ト認ムル書類」には地図、兵要地誌を含んでおります。続いて8月19日付で「作戦用地図処理要領」の通牒が発せられ、細部にわたる指示が行われました(渡辺氏資料8)。指示の内容はおおむね次のようです。

- (1) 参謀本部においては、内邦地形図のうち軍事極秘である2万、1万、5千分1図、および満洲、「ソ」領、関東州の10万、5万、2万5千、5千分1の軍事極秘以上の地図ならびに各地域の兵要地誌図は焼却する。また、内邦地形図のうち軍事極秘(戦地に在りては極秘)および軍事秘密(戦地に在りては極秘)である5万、2万5千分1図は一部残置し焼却する。
- (2) 部隊、官衙、学校においては、参謀本部に準じるほか、三角点成果表および2万分1以上の実測図(築城・射撃のための測図を含む)は焼却する。
- (3) 陸地測量部においては、原図、初刷、三角点成果表は成るべく保管する。原版はそのまま残置するが、ただし軍事極秘である2万、1万、5千分1のものは焼却または破壊する。印刷機、資材等は残置する。ただし一部のレンズは保管する。資材のうち所要のものは職員に貸与支給する。
- (4) 民間印刷会社においては、印刷した5万分1地形図および20万分1帝国図は印刷会社に貸与する。用紙、薬品、

亜鉛版等は陸測主任者と経理上の協議(例えば印刷費を該資材によって現品払いをするような)の上印刷会社に交付する。

原図原版等処理区分表によれば、樺太、朝鮮、台湾、満洲、シベリヤ、支那、南方に関する原図、原版は焼却、初刷(印刷図の第1号)は秘匿、また、地図(印刷図)はシベリヤ、支那、南方に関するものを焼却、となっています。

以上のような指示に従って、直接作戦に係る軍事極秘の大縮尺図等は焼却されましたが、指示対象外の地図類はこの限りではありませんでした。ただし、最初の8月15日付の命令に従って焼却されてしまったものもかなりあったと思われます。

陸地測量部から地理調査所へ

終戦という未曾有の事態に直面して、陸軍部内にも大きな混乱がありました。森超近衛師団長の殺害事件、玉音録音盤奪取未遂事件、阿南陸相の自刃や宮城前その他における割腹事件などが相次ぎました。

このような情勢にあって、陸地測量部の管轄担当であった渡辺参謀は、陸地測量部の将来について憂い、終戦の翌々日の昭和20年8月17日深夜密かに「終戦に当り陸地測量部処理要綱案」という意見具申案を作成して、上司である第二部長有末精三中将に提出しました(渡辺氏資料7)。すなわち、「終戦に伴い陸軍は解体されるが、陸地測量部は国土復興のための必須機構として、平時編成の官庁に移管し、米軍の進駐時には既にその機関があることを認識させ交渉させるべきである」との考えから、陸地測

量部は速やかに陸軍の組織から内務省へ移管することを具申しました。

意見具申案の内容は、本日の報告の核心に当たりますので、その全文を読ませて頂きます。〔意見具申案〕

意見具申案の切々たる文章は、眞に心を打たれるものがあります。30歳前の青年将校が国家未曾有の混乱のなかにあって、冷静さを失わずに発揮された並々ならぬ愛国心、透徹した判断力と優れた実行力に、今日余慶を受ける者の一人として心から敬服するものであります。

意見具申案を受けた有末部長は了承して一切を渡辺参謀に任せました。早速行動に移った渡辺参謀の意見を容れて、若松只一陸軍次官と内務省の岩沢忠恭国土局長との間で協議がまとまり、公式に陸地測量部を陸軍から内務省に移管することが決定され、昭和20年8月30日付で内務省官制が改正になり地理調査所の設置が決定し、同日「陸地測量部条例」が廃止されて陸地測量部は消滅し、9月1日内務省地理調査所が暫定的に3課制(企画・測量・地図)により発足したのです。

新組織である「地理調査所」の名称は、渡辺参謀の発案になるもので、その発想の元は「兵要地理調査研究会」にあるということです。そして、地理調査所の表札は、書をよくされる渡辺正氏の直筆になるものです。

地理調査所の発足に伴い、陸地測量部長大前憲三郎少将始め軍人の主要幹部は退任し、地理調査所長には民間人を当てることになりました。その人選に当って、渡辺参謀は陸地測量部教育部の武藤勝彦技師に就任を促しましたが、武藤氏が当初これを

拒んだので、地理調査所の初代所長には国土局長の岩沢氏が兼ねることになり、岩沢所長の下に、企画課課長鈴木清（元陸地測量部第一課課長陸軍大佐）、測量課課長武藤勝彦、地図課課長馬瀬口久平（元陸地測量部第三課課長陸軍中佐）という編成で発足しました。武藤氏の所長就任は昭和 20 年 12 月のことです。昭和 23 年 1 月になって渡辺光氏が武藤所長の招きで企画課長に就任しています。

終戦直後、進駐軍将校による陸地測量部の視察が行われました。この時に疎開先に只一人同行された渡辺参謀の並々ならぬご苦心の程は、信濃毎日新聞の記事でご承知のことと思います。この時にも岩沢国土局長が現地に手配をして便宜を図るよう様々な配慮をされ、側面から渡辺参謀を援助されたと伺っております。

外邦図の国内搬出に関連して

外邦図は、内邦図とともに終戦後国内に搬出頒布されました。外邦図研究会による追跡調査で明らかにされたように、特に参謀本部に所蔵されていた外邦図は、資源科学研究所、東京帝国大学、東北帝国大学（何れも当時）等に搬出されました。昭和 20 年 9 月当時、地図類に関する残務整理に当たっておられたのが渡辺正参謀でした。資源科学研究所所員で東京帝国大学理学部助教授であった多田文男氏は前記兵要地理調査研究会の一員およびそれに先立って組織された委員会の委員であり、東京帝国大学理学部助手であった木内信藏氏もまた研究会の一員でした（渡辺氏資料 1～5）。また、東北帝国大学の田中館秀三教授は、厚木で進駐

軍の先遣隊代表アイケルバーガー中将与日本軍代表有末精三中将が会見したときに通訳を務められた方でした（岡本次郎：地理学教室創立の年、東北大学理学部地理学教室開設 50 周年記念誌、1995 年 6 月、東北大学理学部地理学教室同窓会発行）。参謀本部からの地図搬出が順調に行われたのは、以上のような参謀本部と地理学者との緊密な人的交流、特に兵要地理調査研究会の存在があった故と理解されます。

私事ですが、昭和 28 年に私が東北大学を卒業して建設省地理調査所地図部企画課に採用されたときの直属上司が、所長武藤勝彦、地図部長渡辺光、企画課長補佐中野尊正の方々でした。これも不思議な因縁で結ばれたものと感慨無量なものがあります。

以上で私の報告を終わります。ありがとうございました。